

コロナ禍への心配が列島に広がるなかでしたが、欠席は二人ですみ、いつもと変わらぬ意気込みで難文に挑みました。今回の第15巻は、比叡山下に逃れた後醍醐勢が北畠顕家率いる奥州勢の到来で勢いづき、京都を占拠していた足利勢を九州に追い落としした経過が中心。秋に予定している旅の舞台が次々に登場して、その日が待ち遠しくなりました。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

(二) 奥州勢坂本に着く事 (三) 三井寺合戦の事

奥州勢、東坂本に到着 (P 433 ~ 436)

後醍醐方期待の援軍、北畠顕家の奥州勢は、箱根の合戦には間に合わなかったが、関東の宮方を加えた大軍で東進を続け、比叡山下・東坂本の天皇勢に合流。ただちに、足利方が陣取る三井寺攻撃にかかった。

三井寺合戦で足利方敗戦 (P 436 ~ 444)

三井寺を守る細川定禅は、京都の足利尊氏に奥州勢の到着を告げて援軍を要請したが、尊氏は顕家の軍勢とは思わず、取り合わなかった。このため、天皇方の猛攻に抗し切れず、足利方は猛火に包まれた三井寺を捨てて、京都に逃げ帰った。

(六) 正月十六日京合戦の事

京合戦でも足利方劣勢 (P 451 ~ 458)

逃げる敵を追って京都に迫った天皇方の大将、新田義貞は都を一望する東山の將軍塚から全軍を指揮。その巧みな戦術で、市街戦を優勢に進めた。

(八) 同じき三十日合戦の事 (九) 薬師丸の事

尊氏、丹波路經由、摂津へ脱出 (P 471 ~ 475)

楠正成は、天皇方が戦意を失って京都から退却したと見せかけて足利方を洛外におびき出す。天皇方は手薄になった足利方の京都残留部隊に大攻勢をかけた。不意を突かれた足利方はあえなく四散。尊氏も丹波路に落ち、播磨国境の三草山を経て摂津に向かった。その途次、相次ぐ敗戦は自分たちが朝敵となっているためだと考えた尊氏は、持明院統・光厳上皇の院宣入手を画策する。

(十) 大樹摂津国に打ち越ゆる事 (十一) 手島軍の事 (十二) 湊川合戦の事

足利方、摂津でも連敗 (P 476 ~ 481)

摂津で軍を立て直した足利方は、京都奪還に向かったが、途中の豊島河原(箕面市)、西宮で天皇方と合戦になり敗北。続いて、海路から上陸した足利方の九州・中国勢と天皇方の四国勢とが激突した湊川での合戦でも足利方が破れ、兵庫に退いた。

(十三) 將軍筑紫落ち (十四) 主上山門より還幸の事

足利方は九州に、天皇は都に (P 481 ~ 485)

「九州で大軍を得て、再起を」という大友貞宗の進言で、尊氏は直ちに大友の船に乗り筑紫を目指す。勝報を得た天皇は山門から都に帰還。凱旋將軍の新田義貞は左近衛中將に昇進した。

(十六) 宗像氏將軍を奉迎 (十七) 少弐と菊池合戦

尊氏を助けた宗像氏・少弐氏 (P 491 ~ 495)

足利勢を迎え入れた筑紫の宗像大宮司の館から、尊氏は太宰府の少弐貞経に助勢を求め。貞経は嫡子貞頼に精兵を付けて尊氏の許に送った。この動きを知った九州宮方の柱、菊池武俊は手薄となった少弐の本拠内山城を襲い、貞経を自害に追い込んだ。

(十八) 多々良浜合戦の事

靈神の擁護か、尊氏大勝 (P 496 ~ 504)

博多北方、多々良川河口の干潟で菊池の大軍に決戦を挑んだ足利方は、菊池勢の内部の乱れや折からの北風による砂塵に助けられて大勝し、反転上洛の足場を固めることができた。菊池勢は肥後に引き上げ、共に出陣した阿蘇大宮司は肥前の山中で自害した。

第17巻輪読予定ページ (4月20日)	
1)	114 六月六日~117 闘ひける
2)	119 ここに~122 合戦なかりけり
3)	135 山門には~139 なりにけり
4)	162 さる程に~167 引つ返さる
5)	168 山門の衆徒~173 なりにけり
6)	173 かかる処に~178 座せられける
7)	178 暫くあつて~182 行啓なる
	185 還幸すでに~186 切られにけり
8)	188 同じき十一日~192 居たりける
9)	192 ここに、判官~196 給ひける
10)	201 初め浄慶~205 盛んなり
11)	207 杣山より~210 帰りける